きょうだい間の信頼感と自尊感情との関連

演習Ⅰ（安立）A 班

1.　問題と目的

人は多種多様な性格の人と関わりながら生きている。高橋・凍田（1994）によると、「性格形成における後天的な環境要因としては、親子・兄弟等の人間関係要因、社会経済的要因、文化的要因等を主体とする家庭環境要因や、学校・地域社会・文化民族的な要因を主体とする社会的・風土的要因があげられる」と述べている。特に出生順に基づくパーソナリティの類型については「長子は面倒見がいい」「末子はわがまま」等、俗説としても広まっている。しかし、その俗説の裏付けとなる研究論文は数少ない。

また、性格形成に影響するものに対人信頼感がある。Rotter （1967）は，人間相互の信頼感を「他の個人あるいは集団の言葉，約束，口頭や文書による陳述を当てにすることができるという個人あるいは集団が抱く般化された期待」と定義している。堀井・槌谷（1995）も「対人信頼感が高いほど，　内的制御傾向にあり，不安が低いことも認められた」と述べていることから、この対人信頼感が人間関係を築く基盤になっていると考えられる。性格傾向は他人に基本的信頼を寄せられるかどうかが重要であり、信頼感の基底となる環境要因が必要である。その基底となる概念に自尊感情があると考えられる。自尊感情は自分には価値があり尊敬されるべき人間であると思える感情のことであり、井上（2008）の研究では「低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して、中間的な評定を与える傾向を示した。またその評定についての確信度も低かった」としている。遠藤・安藤・冷川・井上（1974）は、「自己概念に伴う感情は、個人を取り巻く重要な他者からの関心や評価と深い関連を有する」ことを明らかにした。つまり、自尊感情は自身にとって重要な他者の言動に左右されるということだ。

今回の研究にて、筆者は、自尊感情の形成に関する重要他者を「きょうだい」に絞れるのではないかと考えた。そのことより、きょうだいへの信頼感の高低が、個人の自尊感情へいかに関連していくかの検討を目的とした。

2.　方法

実施日：平成 28 年 6 月 4 日

実施場所：椙山女学園大学日進キャンパス 2-403 教室

調査対象：椙山女学園大学に通う女子生徒 62 人(平均年齢 18.24 歳、標準偏差 0.634)

調査方法：作成した質問紙を女子生徒に配布した。
調査道具：表紙をいれた質問紙 4 枚とペン(または鉛筆)1 本を使用した。

SE-I(自尊感情)尺度（小塩 1998)と対人信頼感不信感尺度(岩崎 2010)を使用し、自尊感情を測る質問紙、きょうだいに対する信頼感を測る質問紙を作成した。教示は「本日は調査にご協力いただき、ありがとうございます。この調査は、きょうだい間の信頼度が自尊感情とどのように関係しているのかについて調査するものです。正しい答えや、間違った答えというものはありません。思った通りに答えてください。この調査は 2 つのパートで構成されています。また、表紙をあわせて 4 枚からなっていますので、乱丁・落丁がありましたら申し出てください。結果はすべて統計的に分析され、プライバシーは守られますので、思ったままに率直にお答えください。それぞれの質問をよく読み、全ての質問に答えてください。回答もれのないようにお願いします。」であった。

きょうだいに対する信頼感を測る質問紙は 5 件法 24 項目、自尊感情を測る質問紙は 2 件法 20 項目となった。対人信頼感不信感尺度(岩崎 2010)には「人」などと表記されていたが、これは全般的な対人関係を図るものであり、本研究に完全に即すものではないため、「人」などの表記を「きょうだい」などに変更して使用した。また、同尺度の項目からきょうだい間の信頼感を測るための項目にふさわしくないと判断した項目があったため、以下の表 1 に記載した 4 項目を削除し、表 2 の項目を使用した。

表1 自尊感情尺度の削除項目一覧

信頼に対する恐怖
人は、他の人を信用しないほうが安全であると思っている。
人は他の人に対して、信用してもよいということがはっきりわかるまでは用心深くしている。
私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。
嘘に対する警戒
人は、チャンスがあれば税金をごまかす。

表2 きょうだい間の信頼感使用項目一覧

信頼に対する恐怖
1.過去にきょうだいに裏切られたり騙されたりしたので信じるのが怖くなっている
2.きょうだいの前で自分をしっかり守っていないと壊れてしまいそうになる
3.気を付けていないときょうだいは私の弱みにつけ込もうとするだろう
4.私はなぜかきょうだいに対して疑り深くなっている
5.自分はきょうだいに利用されるかもしれないと思い気を付けている
6.自分はきょうだいを信用しないほうが安全であると思っている
7.今は何かと話せてもきょうだいなどまったくあてにならない
8.自分はきょうだいの親切心に下心を感じ気を付けている
9.今きょうだいが心から頼れると思っていてもいつか裏切られるかもしれないと思う
嘘に対する警戒
10.きょうだいは厄介な目にあわないために嘘をつく
11.きょうだいは多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする
12.きょうだいはあなたの利益を認めるよりも自分の権利を得ようとする
13.きょうだいは口先ではうまいこと言っても結局は自分の幸せに一番関心がある
14.きょうだいは成功するために嘘をつく
15.きょうだいは近頃あなたも知らないところで悪いことをしている
二面性に対する不信
16.きょうだいはあなたを援助することを内心では嫌がっている
17.きょうだいは自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう
18.私はきょうだいを敵だと思っている
19.きょうだいが自分を大切にしてくれるのはそうすることによってそのきょうだいに利益があるときだ
20.あなたはきょうだいをあまり頼りにしていない
きょうだいに対する理想
21.きょうだいは普段清く正しい人生を送っている
22.きょうだいは基本的に正直である
23.きょうだいは普段ほかの人と誠実に関わっている
24.きょうだいは自分がすると言ったことは実行する

3. 結果

分析には SPSS を使用した。まず「きょうだい間の信頼感尺度」の項目については大幅な添削を行ったため、新たに下位因子を決定する必要があると判断し、主因子法・プロマックス回転にて因子分析を行った。表 3 はその結果であり、算出されたパターン行列をもとに線で囲まれたものを各因子とした。

表3 きょうだい間の信頼感尺度の因子分析結果

項目	1	2	3	4
22.今は何かと話せても、きょうだいなどまったくあてにならない。	1.00	−.20	−.11	.06
10.あなたは、きょうだいを信用しないほうが安全であると思っている。	.96	.00	.08	−.08
17.きょうだいを敵だと感じている。	.91	.15	.02	−.21
19.過去にきょうだいに裏切られたり騙されたりしたので、信じるのが怖くなっている。	.61	−.06	.03	.48
1.きょうだいは、基本的には正直である。	−.60	−.04	.49	−.30
24.きょうだいがあなたを大切にしてくれるのは、そうすることによってきょうだいに利益があるときだ。	.50	.08	.11	.04
6.きょうだいは、成功するために嘘をつく。	−.01	.90	−.11	−.12
2.きょうだいは、多少良くないことをやっても自分の利益を得ようとする。	−.06	.82	−.02	−.09
15.きょうだいは、厄介なめにあわないために、嘘をつく。	.01	.74	.08	.05
14.きょうだいは、あなたの権利を認めるよりも、自分の権利を主張する。	−.17	.59	.30	.34
18.きょうだいの前では自分で自分をしっかり守っていないと壊れてしまいそうになる。	−.26	.54	−.12	.40
8.きょうだいは、普段あなたと誠実に関わっている。	−.10	−.50	.27	−.44
7.きょうだいは、近頃あなたの知らないところで多くの悪いことをしている。	.08	.42	.33	−.13
3.きょうだいは、頼りにできる人がわずかしかいない。	.25	.34	−.17	.04
4.あなたは、きょうだいの親切に下心を感じ、気を付けている。	−.21	−.12	.90	.13
9.あなたはきょうだいに利用されるかもしれないと思い、気を付けている。	−.02	−.09	.88	−.04
11.きょうだいは、口先ではうまいこと言っても、結局は自分の幸せに一番関心がある。	.24	.33	.47	−.09
12.きょうだいは、あなたを援助することを内心では嫌がっている。	.06	.08	.45	.19
21.私はなぜかきょうだいに対して疑り深くなっている。	.36	.12	.39	.34
13.きょうだいは、自分がすると言ったことは実行する。	−.34	−.36	−.09	.71
20.気を付けていないと、きょうだいは私の弱みに付け込もうとするだろう。	.17	−.22	.34	.68
23.きょうだいは、自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。	.32	−.13	.11	.63
5.きょうだいは、普段清く正しく人生を送っている。	.04	−.24	−.08	−.49
16.いつかきょうだいに裏切られるかもしれないと思う。	.20	.43	−.01	.45
因子間相関	1	2	3	
2	.62			
3	.46	.45		
4	.45	.35	.27	

さらに各下位因子にわけたものを信頼性分析にかけ、最終的に項目数と因子名を決定した。各下位因子名と決定する際に信頼性のない項目として削除したものが表 4 である。下位因子は、それぞれ「きょうだいに対する敵対心」、「利益のための嘘」、「きょうだいからの防衛」、「きょうだいからの裏切り」と名付けた。第一因子は、きょうだいに対して信用しないほうが安全であると思い、信じられなくなっている、きょうだいを敵だと認識しているかを問う因子であったため「きょうだいに対する敵対心」と名付けた。第二因子は、きょうだいが自分の利益や厄介なことに巻き込まれないために嘘をつくのかを問う因子であったため「利益のための嘘」と名付けた。第三因子は、きょうだいに利用されないように気を付け、きょうだいに対して疑り深くなっているのかを問う因子であったため「きょうだいからの防衛」と名付けた。第四因子は、きょうだいが弱みに付け込もうとすることや、何かがあれば簡単に裏切ることができるのかを問う因子であったため「きょうだいからの裏切り」と名付けた。

表4 きょうだい間の信頼感尺度の信頼性分析結果

因子名	Cronbach のアルファ
第1因子　きょうだいに対する敵対心	.90
第2因子　利益のための嘘	.84
第3因子　きょうだいからの防衛	.85
第4因子　きょうだいからの裏切り	.88
削除項目	
きょうだいは、基本的には正直である。	
きょうだいがあなたを大切にしてくれるのは、そうすることによってきょうだいに利益があるときだ。	
きょうだいは、普段あなたと誠実に関わっている。	
きょうだいは、頼りにできる人がわずかしかいない。	
きょうだいは、自分がすると言ったことは実行する。	
きょうだいは、普段清く正しく人生を送っている。	

次に「自尊感情尺度」の各下位因子と「きょうだい間の信頼感尺度」で新しく決定した各下位因子で、回答の平均値と標準偏差を算出した（表 5)。それをもとに相関係数を算出した（表 6)。

表5　2つの尺度の下位因子ごとの平均値と標準偏差

きょうだい間の信頼感尺度	平均値	標準偏差
きょうだいに対する敵対心	1.60	.83
利益のための嘘	2.39	.93
きょうだいからの防衛	1.97	.94
きょうだいからの裏切り	1.72	1.08
自尊感情尺度		
自意識過剰	1.31	.28
自己価値	1.63	.35
劣等感	1.21	.33
評価過敏	1.14	.24

表6　2つの尺度の相関係数

	評価過敏	自意識過剰	自己価値	劣等感
きょうだいに対する敵対心	-.09	-.15	.27	-.08
利益のための嘘	-.25	-.34	-.01	-.14
きょうだいからの防衛	-.05	-.16	-.16	.21
きょうだいからの裏切り	-.21	-.35	-.03	-.17

*p>.01 **p>.05

しかし明確な有意差は判別されなかったため、次に「きょうだい間の信頼感尺度」の下位因子を、平均値を基準としそれ以上の High 群と以下の Low 群に分け t 検定をかけた。すると「きょうだいからの裏切り」因子と「評価過敏」因子間で有意差が出た（表 7）。

表7　群分けのt検定

		等分散性のための Levene の検定	2 つの母平均の差の検定		
		有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）
評価過敏	等分散を仮定しない。	.04	2.30	26.55	.02

グループ統計量

因子名	きょうだいからの裏切り	N	平均値	標準偏差
評価過敏	high群	23	1.16	.26
	low群	7	1.03	.05

4.　考察

きょうだい間の信頼感の項目を因子分析にかけパターン行列を算出した結果、「きょうだいに対する敵対心」、「利益のための嘘」、「きょうだいからの防衛」、「きょうだいからの裏切り」という 4 つの因子が抽出された。また自尊感情の項目は先行研究と同様に「自意識過剰」、「自己価値」、「劣等感」、「評価過敏」の 4 因子が抽出された。

きょうだい間の信頼感の各因子に対して信頼性分析を行い信頼性のない項目を削除し、下位因子を決定した。その後きょうだい間の信頼感の下位因子と自尊感情の下位因子の相関係数を出そうと試みたが、結果はでなかった。その理由として集めたデータが想定数を下回ったことや質問紙の教示がわかりにくく、無回答が多く使用できない質問紙が多かったことが挙げられる。

そこできょうだい間の信頼感の下位因子を平均値を基準に High 群と Low 群に分けたうえで t 検定を実施した。その結果、きょうだい間の信頼感の下位因子である「きょうだいからの裏切り因子」と自尊感情の下位因子である「評価過敏因子」で有意差があり、相関がみられた。裏切りに関しては、生まれてから生活する中で時間的に長く共に過ごすと考えられるきょうだいから裏切られることに対して、恐怖などの感情を抱いているのではないかと考えられる。また評価過敏に関しては、人間は誰もが他者からの評価を気にしたことがあるといえる。しかしきょうだいがいる者はきょうだいからも評価される場面があるだろうといえ、この部分は一人っ子とは大きく異なる部分である。そのため、他者からの評価により敏感になっているのではないかと考えられる。これらより、きょうだいからの裏切り因子と評価過敏因子には相関がみられたのではないかと考えられる。

今回の質問紙調査はきょうだいからの裏切り因子と評価過敏因子以外には明確な有意差は算出されなかった。その理由としてまず、収集したデータが 62 だったのに対して有意回答数は 37 と約半分になってしまったことである。無効になってしまった回答のほとんどが後半の質問項目に対して無回答であったことから、実施する側の指示や教示が十分にできておらず、回答者にとってわかりにくい指示であったと考えられる。この点に関してはページ数を質問紙に記載して、ページ数で指示を出すということや、質問紙を 2 種類作成しきょうだいの有無でそれぞれ実施するなど配慮があれば今回の調査よりも有効回答数が増えると考えられる。

またそのほかの相関がみられなかった要因としてきょうだい間の信頼感尺度を 5 件法、自尊感情尺度を 2 件法で実施したことが挙げられる。どちらも先行研究での方法を優先して採用したが結果として偏りがうまれた。2 件法か 5 件法のどちらかに統一するなどして実験者側で調整するべき点であったといえる。

当初の分析ではきょうだいを持つ人と持たない人で自尊感情の比較を考えていたが、検定にかけられるほどのサンプルが集まらなかったため断念した。またより正確なデータを算出するためには、きょうだいを持つ人、持たない人のサンプル数を統一しなければならないといえる。

今回の調査で「きょうだい間の信頼感が高い人は評価過敏因子が高い傾向にある」という仮説をたてた。しかし今回の調査結果では「評価過敏因子が高い人ときょうだいからの裏切り因子が高い人はやや相関がみられる」というものであった。よって仮説は実証されなかったといえる。

しかし今回の調査ではサンプル数の少なさや尺度の用い方など改善点の多い調査であったことがいえる。そのため今後これらを改善して再度調査することでより実態に近づいた結果があらわれると考えられる。

5. 引用文献

遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治(1974) Self-Esteem の研究　九州大学教育学部心理学部門紀要　18,2,53-65

堀井俊章・槌谷笑子(1995) 最早期記憶と対人信頼感との関係について　性格心理学研究　3（1），27-36

井上祥治(2008) 自尊感情と自己概念の明確性および時間的安定性　岡山大学教育実践総合センター紀要第 8 巻　pp.73 - 80

伊藤正哉・小玉正博(2006) 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討－本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して―　教育心理学研究　54,222-232

岩崎和美(2010) 対人信頼感におけるパーソナリティの影響について - 『原子価論』に基づく実証的研究 -　奈良大学大学研究年報第 15 号　57-68

小塩真司(1998) 青年の自己愛傾向と自尊感情,友人関係のあり方との関連　日本教育心理学研究　46,280-290

Rotter,J.B.(1967) A new scale for the measurement of interpersonal trust,J.Personality 35,651−665

高橋 正臣・凍田 和美(1994) 人格形成を規定する要因分析(VI)：家庭における文化的環境要因の変化が性格形成に及ぼす影響について(2)　大分県立芸術文化短期大学研究紀要 32, 1-20